
過去の記憶

斎木 はな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去の記憶

【Zコード】

N1848M

【作者名】

斎木 はな

【あらすじ】

私はいつからここにいるのだろう。どうやって来たのかすらわからない。覚えていない。この場所には何もなくそれどころか誰もない。どれだけ歩いだらうか。人がいた。この出会いによつて私の記憶が少しずつ呼び戻される。ただ・・その記憶も創られたものかもしれないが・・・。

私の記憶

私はそこにはいた。
どうしてここにいるのか、どうやってここにまで来たのか、覚えていない。

周りを見る。

地平線が見える。誰もいない。それどころか何もない。
そして言えば、瓦礫や植物があるくらいだ。
上を見る。この場所にふさわしくないほど、その空は澄み切っていた。

私は何かを思い出そうと頭を働かせてみる。
しかし思い出せる事はなかった。記憶がないのかと思つほど、何も思い出せなかつた。

いぐら目を閉じてもただ見えるのは白い世界。
上下左右、前も後ろも見るがただ、真っ白。

私は思い出すことをやめた。無意味だと気付いたからだ。

「現在」を過ぎたものは「過去」でしかない

「過去」に戻ることも変えることもできないのだ。

できるとすれば自身で「過去」を創ることもぐらいか。。。

イツワコの「過去」を。

（さて、どうしたものか）これから的事を考えてみる。顎に手を、頭を少し傾けてそれらしく。
誰も私を見る者などいないの。

（しかたがない）私は歩くことにした。

あてはない。ただここにいても何もかわらないので歩くことにしたのだ。

しばらく歩く。ふと、視界にさつきまで見ていた光景と違つものが入ってきた。

それは地面に横たわっていた。

（何だ？）不思議と興味が湧く。

その“何か”的周りをぐるっと回つてみることにした。
正面に来た時それが何かわかった。

それは小さな“私”だった。

（どうして？）

小さな“私”的傍にはクマのぬいぐるみが転がっている。

（これは？私・・・の？）

ぬいぐるみを取ろうと近くへ寄つたその時、

「だめ！それはあーちゃんのー！」

（生きてた）

「この子はね、賢いんだよ？」知つてる？とこう顔で小さい“私”
は私を覗き込む。

（賢い？ぬいぐるみが？）

「だつてね、私が迷つたらどこに行つたらいいのか教えてくれる
だよ！」

「す」いじりでしょ？満面の笑顔で話は続ぐ。

「さつきもね、私が疲れちゃつたつて言つたら寝たらいいんだよつ
て教えてくれたんだ！」とクマのぬいぐるみを私に見せる。

私はジッとぬいぐるみを見る。

しかし、特に変わったところはない。至つて普通のぬいぐるみだ。
(やうこえ、ま、小さい時にこんな感じのぬいぐるみを持つていたよ
う・・)

もう一度「過去」を思い出してみようと試みる。が、何かが邪魔するかのように霧がかかっていてうまくいかない。

「……ちゃん！ねえ、……いちちゃん！お兄ちゃんでばー！」

我に返る。下のほうから、小さい“私”が必至に私を呼んでいた。

「……がね、お兄ちゃんは戻ったほうがいいってゆつてるよ？こつ

ちに戻りすぎだつて」

（戻りすぎ？そんなに歩いていないはず。）振り返るが、見えるのは地平線のみ。

「だから、早く戻ったほうがいいよ」やうひりて私を指差す。

いや、正確には私が歩いてきた道を。

そして私は小さな“私”に別れを告げ、少し歩く。まだ小さな“私”が見ているような気がしてそつと振り返る。

しかし、そこにはもう誰もなかつた。

ただ、白いもやっとしたものが空中に浮かんでいるくらい。だがそれもすぐに消えていった。

（さつきまでそこへいたのにいつの間に？）隠れる場所なんてないのに・・・

しばらくもと来た道を戻る。・・・多分だが。

とりあえず田印になるものがないのだ。ただただ地平線が見えるだけ。

空には雲ひとつなく、風もない。

はたしてこの植物たちはどのように成長しているのだろうか？

そんな疑問も浮かんでくるものの、私にとつてはどうでもいい分類にすぐさま振り分けられた。

どれだけ歩いたのだろうか。

1時間？半日？それどころか数分しかたつていらないのかもしれない。
(休憩するか。)

実際にはそれほど疲れていなかつたのだが、どうこもひひこもすつ
と同じ風景しかない。

飽きた。

草の上に横になつてみると、しばらく動かずじつとしていると眠気が
じわじわと忍び寄ってきた。

思つていた以上に疲れていたようだ。目を閉じる。

いつの間にか深い闇の中に落ちていつた。

闇の中で遠くに小さな光が見える。針の六ぐらいの光だ。
そこから声がする。聞いたことのあるよつた、懐かしい声だつた。
耳を澄ます。

「あーちゃん、いい子ね。だからママがこいつて言つまでもこの中で
おとなしく待つていいのよ？」

ママと名乗る女がそう言つた。

「わかつたー！あーちゃんいい子だもん。」の子と一緒に待つてゐるよ
！」

「偉いわね。後でおやつをあげるからね。」やつと終わると同時に扉
に扉が閉まる。

暗闇が広がる。やつとなくむしろ狭いこの空間でも闇とこいつの
はどうしてこいつ延々と続くのか。
扉の向こうから声が聞こえてくる。

「おい、いいのか？あんな所にいれておいて・・・」

「大丈夫。あの子暗いとこ平気みたいだし、好きなぬいぐるみと一緒に
緒だもん。」

「平気ならいいけど。でも俺邪魔されんのはやだぜ？」

「私がいこつて言つままで出でこなこわよ。それより早く上へ行きましたよお？」

「わかった、わかった。」

声と足音が遠ざかる。この部屋にはもう私しかいない。

しばらぐあるとこつもと違うママの声と何かの物音。大丈夫。いつものように少ししたらママがもつといよつて言つててくれる。

大丈夫。大丈夫。大丈ぶ・・大じょう・・ぶ・・・・・

気がついた時にはさつままでいたはずの狭くて暗い場所、じやなかつた。

薄暗い部屋にいた。ママの声も聞こえない。物音もしない。探しに行こうと振り返る。

ママはそこへいた。見たことのない、パパとは違う男と一緒に。

「ママ？」

近寄ろうと一步踏み出した瞬間、足の裏に何かぬるつとしたものが触れた。

恐る恐る下を見る・・・

血だ。

ゆつくりと田線を上げる。視界に一人の体が見えた。折り重なつているにも関わらず、ピクリともしない。

次の瞬間、自分でもびっくりするくらいのとても自分の声とは思えないような声で絶叫していた。

飛び起きる。

すぐに私は足を見る。・・・赤く、ない。

夢だったのか。しかしそれはとても現実のように思えた。
(夢?にしてははつきりと感触があったような・・・)

しばらく乱れた呼吸を整えるため深呼吸を繰り返す。だんだん落ち着いてきた。

その時、後ろから不意に声が聞こえた。

「大丈夫? すこい声が聞こえたから様子見に来たんだけど。」

そこにいたのは、大きな”私”だつた。

「大丈夫か? 不安そうに私を覗き込む、大きな”私”。

返事をしようと声を出そうとしたが先ほどの夢がよほびショックだつたのか、うなずくことしかできなかつた。

「なら良かつた。散歩していたら急に悲鳴が聞こえたんだ。びっくりしたよ。何かあつたのか?」

首を横に振る。（ただ夢に驚いただけだ・・なんともない）

半ば自分に言い聞かせた言葉だがなんとなく伝わつたようだ。

「それにしても、ここのはどこだ? セツキまで公園を歩いていたと思つたんだが・・?」

まあいいか、と大きな”私”は右手を差し出してきた。しつかりと掴み起こしてもらつた。

（どれくらい寝ていたのだらう? といつが今は何時だ?）

「さて、どうするかな。なあ、お前はどうするんだ?」

（私は・・どうしたいんだらう? 何だかもうどうでもいいような気がしてきたけど）

そんな事を考へていると、大きな”私”は話しだした。

「なあ、とくに急いでないんなら俺の話・・聞いてくれないか?」

大きな”私”の話とはこんな内容だつた。

俺さ、小さい時の記憶がないんだよ。まあ、あるんだらうけど覚えてないといふか・・

何か感覚的には覚えているような気もしないんだけど、わからなくて。

で、ある時見つけたんだ。新聞の折り込みチラシ? つていうのかな。あんなのにこう書いてあつたんだ。

【あなたの人生の記録である、”記憶”を残しませんか? モニター大募集! !】

つてさ。最初はうそくせーって思つたけど、だんだん気になつてきて。

何日か悩んだ末に電話しちやつたんだよ、俺。

すっげー、キドキしながら、でもそんな様子相手に悟られたくないから必死に声だけ取り繕つたりしてさ。

で、モニター登録はしたんだけどすぐにはできないらしくてまずはカウンセリングをするつてことだつた。

適応できる人とできない人がいるんだつて。

まあもちろん俺はパスできたんだけど。

ただ・・その後が・・なかなか悲惨だつたかな。急に泊まり込みで行うつて話になつたんだよ。

あつという間に連中に連れて行かれて。建物に軟禁状態。びっくりしたよね。

その時かな? 「騙された!」と思つたのは。まあ半々だつたけど。え? ああ、半々つていうのは、記憶が戻つて記録はできたんだけど実際はモニターなんていいものじゃなくて、

実験体だつたんだよ。だから、半々。

そこまで大きな”私”はいっきに話終えると深呼吸した。

そして続きを話し出す。

そのあと、何力月かそこにいて俺は記憶を残した。

どうやつて? · · · いやそれが覚えてないんだよ。

不思議だよな、記憶を記録しに行つたのにその時の事覚えてないな

んで。

まあ連中が外にばれたらヤバイってんで消したのかもな。簡単だろ、連中なう。

で、もともとの目的だつた小さい時の記憶なんだけど。記録はできたんだつてよ。ただ・・よほど記憶だつたのか連中、俺に見せてくれないんだよ。

おかしくねえ？だつて俺の記憶だぜ？なんで俺が見れないんだよ。あつでも全く見れてないつてわけじゃないんだ。ほんと数秒だけ連中の隙見て覗いてやつたんだ。

そしたら小さい頃の俺が映つていてさ。ぬいぐるみを持っていたよ。クマの。

そしたら断片的にだけちょっと思い出せたんだよな。

そういうや昔やたら暗いとこに入れられてたなーつて。なんでだつたか忘れたけど。

大きな”私”は私を見た。そこには何故かなつかしむような雰囲気があつた。

「お前もいつか気づくときがくるよ。」そう言つて立ち上がる。「悪かつたな、俺の話なんか聞かせちまつて。そろそろ行くわ。」

（どこに？つていうか何に気づくの？）見上げてみるが白いもやつとしたものが邪魔をする。

（霧？また？）周囲を見渡しもつ一度見上げる。しかしそこにはもう大きな”私”はいなかつた。また、一人になつた。

私は立ち上がつた。ここからどうすればいいのかわからない。とにかく、何もないのだ。散々歩きまわつた結果、出会つたのはたつた2人。

しかもどこから来て、どこへ行つたのかもわからない。

”絶望”

ふと、そんな言葉が出てきた。

ただもつとす””絶望を感じたことがあるよつな気がする。

それがいつかはわからない。そんな気がするだけかもしれない。

私はもう一度寝ることにした。もしかしたら、次に目が覚めた時ここではない場所にいるかもしれない。

そんなことを考えながら、私は目を閉じた。

せんせい、進藤先生！

進藤は振り返った。いつのまに来たのか後ろに林が立っていた。

「進藤先生、もうすぐ時間ですよ。また一日作業していくんですか？」

そう言いながら林はガラスの向こうにあるものを興味津津と覗く。

「ああ。数少ない成功例だしな。ちょっとやつたこともあつたし・もうこんな時間か。」

「まつたく、時間がいくつあっても足りないよ。」

「特に進藤先生の研究は奥が深いですしね。いつか私も”一緒にできる日が来ればいいんですけど。」

「君はここで研究なんてしている場合じゃないだろう？ちやんと上にいてくれないと。」

「わかつてますよ。それでないとこの研究が完成するなんてないでしうしね。」

さあ行きましょう、そう言つて林が歩きだす。

進藤は機械の電源を切り、監視カメラの電源を入れ部屋の電気を消した。

ハタン、とドアが閉まつたその部屋に残つたのはただただはてしない闇だった。

私の記憶（後書き）

いかがでしたでしょうか？一応連載といつて続けの作品を書くつもりです。はたしてこの作品の最終はどうなるのか私もわかりませんが、納得できるものを書きたいと思います。また読んでいただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1848m/>

過去の記憶

2011年1月19日07時39分発行